

---

---

イサム・ノグチ《広島の亡き人々のための記念物》、その構想の推移について

---

---

イサム・ノグチ(1904-1988)が、1952年に発表した《広島の亡き人々のための記念物》（通称「広島原爆記念碑」、以下《記念碑案》と表記）は作者自身の発言から、1952年春に依頼され、「ハニワの屋根」の形を模した作品として語られてきた。また公表されている地下慰霊堂と地上モニュメントの構成写真に依拠しながら、その造形的意義を推し量る試みがなされ続けている。

しかしながらこうした慣例には疑う余地がある。まず、近年公開された丹下健三(1913-2005)の広島市幹部宛書簡23通(1949.11.27-1951.5.27)の内容を照合した結果、遅くとも1951年4月までに、丹下はノグチに《記念碑案》を制作依頼していたことを明らかにする。つまり、ノグチが《記念碑案》に取りかかった時期は、亡父野口米次郎記念として発案され、1年前に設計を終えていた慶應義塾大学《萬來舎》の建設期間と重なっていたという事実を指摘する。

次に《記念碑案》は、基壇と拝礼台に、はっきりとした目地が刻まれていることを特徴とするが、この点に関する踏み込んだ解釈を試みる。この目地は、少し形を変えて《イェール大学バイネッケ稀観本・手写本図書館枕床園》(1960-1964)で実現された。その際の作者の言葉から「エネルギーの流れ」を示していることは明白である。本発表では、ノグチが《記念碑案》地上部分のモニュメントを「漠然とキノコ雲に似せる」とした未発表原稿の記述に注意を払う。さらには広島調査滞在中、貴重な時間を割いて ABCC(現・放射線影響研究所)を訪問していることに着目する。そして、目地の線の「エネルギーの流れ」とは、《記念碑案》では、とりわけ「放射線」を意図していた可能性について検討する。

最後に、NYのイサム・ノグチ財団に保管されている《記念碑案》の地下慰霊堂部分の写真20枚と地上部分20枚のコンタクトプリントに着目する。それらに関する詳細な分析は未だなされていない。ところがこれは大いに注目に値する。というのも、この地下部分の写真には、2本の柱の角度、犠牲者名簿安置箱、天窓からの採光などの点で、構成写真とは大きく異なる試行錯誤の跡が確認できるからである。また地上部分に関しても、複数の照明パターンを試した形跡が認められる。するとこの時期ノグチが照明器具《あかり》の構想中であったことも、《記念碑案》との関連で勘案すべき対象として浮上して来る。

結論として、《記念碑案》は、当初は慶應の《萬來舎》との継続性から、父性に対するコンプレックス克服として構想が始まり、原爆を想起させる警告記念碑的意味合いを増しながら、最終的には、地下慰霊堂天窓から差し込む光によって「再生」と「転生」を強く印象づける造形へと変貌していった作品であったと結論づける。